

トークセッション

多様な性と家族、パートナーシップ

～コウノドリ作者と考える多様な生き方と制度～

講 師

鈴ノ木 ユウ

漫画家

コーディネーター

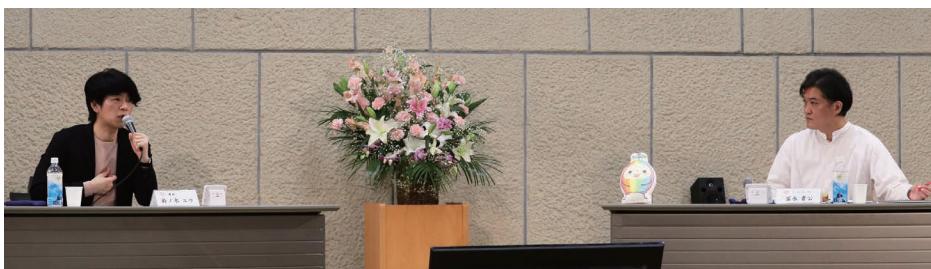
富永 貴公

都留文科大学教養学部准教授

司 会

飛嶋 一步

コプリズム代表



【第1部】

▼司会(レイン坊):本日司会をします、山梨県のLGBT団体「コプリズム」代表の飛嶋一步です。本日は私たちの団体のキャラクター「レイン坊」が代わりに登壇しております。皆さまよろしくお願ひいたします。この分科会は皆さんにいただいたご質問をもとに、トーク形式で、ゲストの方のお仕事や家族、LGBTについてお話ししていきます。

さっそく、ゲストとコーディネーターのご紹介をします。ゲストは甲府市出身の漫画家、鈴ノ木ユウさんです。代表作に第40回講談社漫画賞も受賞した、産婦人科が舞台の漫画「コウノドリ」があります。この作品の25巻では、女性同士のカップルの出産が描かれています。コーディネーターは山梨県都留市にあります都留文科大学教養学部准教授の富永貴公さんです。ジェンダー・社会教育が専門です。自己紹介をお願いします。

▼鈴ノ木:はじめまして。モーニングという雑誌で「コウノドリ」という漫画を連載していました鈴ノ木ユウです。今日はよろしくお願ひします。

▼富永:はじめまして。山梨県都留市にある都留文科大学で教えております富永貴公と申します。専門は、ジェンダー・セクシュアリティに関わった、特に学校以外の場所における教育を専門にしています。今日は90分という限られた時間ですが、鈴ノ木さんに皆さんからお寄せいただいた質問をぶつけていきながら、有意義な時間にしたいと思います。早速ですが、改めて漫画家を目指された理由や背景につきまして、お伺いしたいと思います。

▼鈴ノ木:僕はもともと音楽をやっていましたが、事務所に入っていて、そこをクビみたいになって。知り合いの友人の漫画家から「働いていないのなら手伝いに来い」と言われたのが漫画を描いたきっかけです。それで1本漫画を描いて、「ちばてつや賞」という賞を取ったんですよ。

ですが、その時付き合っていた今の奥さんの妊娠が分かり、漫画家を目指すのはやめ、牛丼屋とラーメン屋でアルバイトをしていました。でも、息子がしゃべるようになって「お父さんの仕事はなんだ?」って聞くから、「お父さんの仕事はアルバイトだよ」と答えた後、息子が忘れないように「バイト、バイト」と繰り返し言つて、「お父さんの、仕事は何な



の？」と聞かれると、息子が「父ちゃんはね、バイト」と言うので傷ついて、それでもう1回漫画を描かせてくれということになりました。

それからもう1回、ちばてつや賞に出て、もう一度賞を取りました。一度、音楽物を連載したんですが人気が無くて、次は何を描こうかと迷っていた時に、うちの奥さんが「産婦人科を描いてみたら」と言ってくれました。息子を取り上げてくれた先生が、ピアニストの産婦人科の先生だったので、そこからヒントを得て。読み切りで一度描いた「コウノドリ」が人気を得て、連載が決まったという流れです。

▼富永：漫画描いてみないかと誘われた時、いきなり手伝ってくれと言われて、やれるものですか。

▼鈴ノ木：最初は、下書きに消しゴムをかけたり、ベタと言って髪の毛の黒い部分を墨で塗るという作業だけですが、手伝いながら、独り言で「俺、漫画描けるな」と言ったら、「お前なめんなよ」と言われて。そのまま文房具屋さんに連れて行かれ、「じゃあ、1本書いてみろ」と言われて書いたのが賞を取りまして。「おっ、やるな」みたいな空気になったのですが、そこは運が良かったのでしょうかね。

▼富永：漫画の中でも息子さんは、おまけのコーナーで登場しています。その息子さんの出産をきっかけに漫画を描こうと思われたということですね。

▼鈴ノ木：そうですね。おそらく息子の出産がなかったら、産婦人科の先生を描こうとは思わなかつたと思います。

▼富永：産婦人科をテーマにしてみたらどうか、というお話をあった時に、理由は聞いたんですか。

▼鈴ノ木：妻とお酒を飲んでいる時、何を描こうかという話をしていて、編集の人は音楽物がいいと言っていたのですが、息子を取り上げてくれた大阪のりんくう総合医療センターの荻田先生がピアニストで、産婦人科の先生をやっていると聞いて、奥さんが「ピアノが弾けて、お産も取れる、ゴールドフィンガー。どうよ」って言つたんです。「面白いね」というところから、妻の幼馴染の産婦人科の先生に一度話を聞いて、その聞いた話に衝撃を受け、音楽物より産婦人科の先生を描きたいと思ったんです。

▼富永：あの話に関わってきますが、ずいぶん丁寧な取材をされていらっしゃいます。大阪まで通ってらっしゃったんですか。

▼鈴ノ木：そうですね、当時、妻の幼馴染の先生は横浜に住んでいて、横浜で産婦人科の先生をやっていました。最初は読み切りだったので、帝王切開の話と無脳症という、赤ちゃんがお腹の中で脳ができるないという話を4本描いた時は、毎週、横浜まで通って、先生に話を聞き、作っていました。

▼富永：なるほど、その漫画家というお仕事についても、後ほど詳しく聞いていきたいと思いますが、「キャリアとは何か」という質問を参加者からいただいています。キャリアというと仕事を想定されることも多いのですが、アメリカの心理学者D.E.スーパーという人が、「ライフキャリアレインボー」として、人生の中での役割と場面に応じて整理をしてみたというのがこの図です。

子どもと学ぶ人、余暇を楽しむ人、市民、働く人、配偶者、親というふうに、おおよそ8つの役割が私たちの人生には登場してくると。一番最初は子どもから始まっていくわけですが、40代・50代になると、おおよそ全ての役割を重ねながら、私たちはこのライフキャリアを構成していくと説明しています。

鈴ノ木さんの話にもありましたが、特に黄色の働く人、働くことに関わっては、配偶者として、親として、そうした役割との関連の中で、私たちはさまざま、その時に選択をしていくということになると思います。この分科会は性の多様性の分科会ですので、この点に限って見ると、一番下のところ、のちほど女性同士の妊娠出産の話もさせていただきたいと思っていますが、配偶者や親ということに関しては、制度的に十分な保障がされてない状況があると、この図の中からも考えられるのではないかと思います。多様な役割を担いながら、私たちの人生が構成されているということを、皆さんとここで共有をしたいと思います。

先ほど、息子さんやお連れ合いの話もありましたが、鈴ノ木一家はどんな家族かという質問です。お仕事が漫画家さんなので、取材も含めて、けっこう不定期で、日によって違うお仕事のされ方なんじゃないかと思います。例えば1日の生活時間がどんな感じで、お子さんとどんなふうに関わっていますか。

▼鈴ノ木：今は連載も終わって、家族で話す時間もあるのですが、基本的に連載中は、話を作るのに、お医者さんとの取材を含めて4日半から5日かかります。

最初の3日間くらいは、歩いたり、ぼうっとしたりして、打ち合わせ以外の時は、話をどうしようかと家の近所を散歩するので、ジャージ姿で髪もぼさぼさで、たまに息子が学校帰りに僕を見かけるのですが、ちょっと声をかけられなかったと言われます。それくらい切羽詰まった顔をしているのでしょうかね。

それからネームという話の青写真の作業に入って、原稿に入るのですが、うちは基本的に朝の7時半からご飯を食べると



というのが家族のルールで、3人で食べるのですが、朝の連ドラを見ながら食べて、息子は学校に行って、僕は仕事場に行きます。9時からアシスタントの人たちと一緒に夜の7時まで仕事をします。僕は7時半に夕食を食べるので、食べた後に10時半ころまで、子どもと遊んだり、話をします。子どもが小さい時は寝かしつけたりして、そのまま僕も12時とか1時ころまで寝たりします。そしてまた仕事場に戻りまして、朝7時半まで仕事です。スタッフは僕が描いた人物に背景とかを付けるので、スタッフが来たらすぐ作業ができるように自分の作業を進めて、そして朝ご飯を食べるみたいな流れになります。

▼富永：となると、睡眠時間はどれくらいですか。

▼鈴ノ木：原稿に入ると2時間ツーセットとか、3時間1発とかですね。連載が7年半続いたので、その間は布団で寝たのは数えるくらいしかないです。

▼富永：漫画家さんというのはどのような生活なのか、どのような働き方なのか、あまり聞いたことがないような話ですが、2時間半の睡眠が7年半続くと、私なんかは体を壊すのではないかと想像します。産婦人科の漫画を描きながら体を壊されたことはなかったのですか。

▼鈴ノ木：2度ほど、手足口病と溶連菌にかかりまして。よっぽど体が弱っていて、子どもがかかる病気に2度ほどかかりました。それ以外は一度も原稿を落とさず続けてこられました。

▼富永：一読者としては、そういう身を削ったお仕事ぶりから生み出された漫画を私たちは楽しんだのだなと、改めて鈴ノ木さんに感謝したい気持ちになりました。先ほどお話があったように、息子さんは最初バイトだと思っていて、それから漫画家というお仕事に変わられて、2時間半ほどしか眼らずに働かれていらっしゃったわけですが、息子さんからこんな反応があったとか、そういうことがありますか。

▼鈴ノ木：息子は小さい時はわりと自慢じゃないけど、誇りに思っていたようですが、だんだん大きくなってくると、「コウノドリの息子」みたいに言われるのが嫌になってきたみたいです。基本的に忙しくて家族旅行に連れて行ってあげたことがないんですよ。それで息子が小学校5年生の時に作文を書きまして、その作文が、「僕のお父さんは漫画家で、忙しくて僕は家族旅行に行ったことがありません。僕の友達は行っているのに、僕は行ったことがありません。でも一番お父さんに伝えたいことは『ゆっくり休んでほしい』です」という作文だったんです。それを読んで、一度、旅行に連れて行かなければいけないなと思いました。じゃあ明日、名古屋に旅行に行くか、と言ってそのまま旅行に行ったことがあります。京都まではちょっと遠くて、「そうだ名古屋に行こう」みたいな感じで名古屋まで行ったことがあります。息子とはそんな感じで付き合っています。

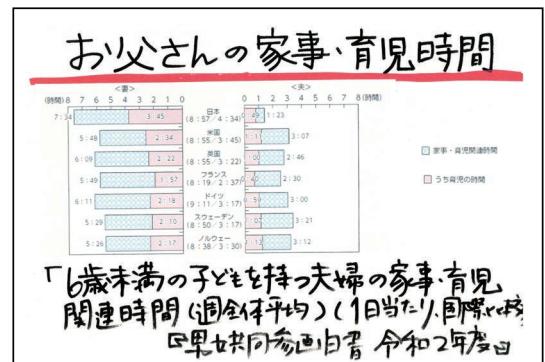
▼富永：ありがとうございます。オンラインで名古屋から参加されている方もいらっしゃると思いますので、一番最初の鈴ノ木一家の旅行先は名古屋だったと。名古屋の一番の思い出は何だったのでしょうか。

▼鈴ノ木：手羽先を皆で食べて、骨をキャンプファイヤーみたいに皆で立てていったという思い出です。お皿の上に。食べた骨が残るんですよ、それを崩さないように皆で並べていったという楽しい思い出がありますけど。

▼富永：もう一つそのことに関わって、皆さんあちこちで聞かれていることだと思いますが「日本のお父さんたちの家事・育児時間」というのが表で、6歳未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児時間、週全体平均を図でお示しします。日本・米国・英国・フランス・ドイツ・スウェーデン・ノルウェーという7カ国の状況が表にあります。6歳未満の子どもを持つ家事・育児関連時間ということで、7カ国取り上げてみると、合計はそんなに変わらないです。おおよそ8~9時間。国の状況に応じて、生活環境や働き方によって8時間9時間で、夫婦が行っている全体の時間はそれほど変わらない。しかしながら、日本の状況を見てみると、夫と妻でずいぶん差があるということです。男性の家事育児への参加を考えてみた時に、鈴ノ木さんは2時間半の睡眠時間でお仕事をされていましたが、その間の家事は、どんな状況でしょうか。

▼鈴ノ木：僕の場合は、奥さんに頼っていたところが本当に多かったです。ただ僕の妻はミュージシャンをやっていまして、僕が音楽事務所にいた時の先輩です。今も音楽活動をしているので、彼女の音楽活動を優先にしようと僕が決めまして、彼女が音楽活動の時は僕が育児・家事を全部サポートするという形にしています。彼女には気持ちよくそっちの活動をさせてあげようと決めていて、毎日夕飯の時に、僕と奥さんと息子のスケジュールを自分で伝えるようにして、自分がこうしたいというものを優先しようというやり方をしています。どうしても僕の仕事が優先になりますが、2人の意見を大事にして、その時は漫画の仕事はやめて、家事と育児をやるという方法をとっています。

▼富永：先ほど「ライフキャリアレインボー」をご紹介しましたが、お子さんの成長に伴いながら、ご家庭の状況は変化していくわけですし、夫婦それぞれの仕事の状況なんかも関わりながら、サポートしあいながら、ということですね。



▼鈴ノ木：そうですね。お互いのスケジュールを共有しているというのも大事かなと思います。

▼富永：「コウノドリ」の中でも妊娠・出産の際、夫の理解が一つも得られないという場面がかなり登場しますし、最終的に産む、産まないという決断に関わっても、お父さんのほうは口出ししづらい状況が描かれていたと思います。そういう大きな決断をする時に、何が決定的な要因になるのかは、人それぞれだったかなと。

▼鈴ノ木：そうですね、それぞれ家庭の事情もありますし、そういうのはそれぞれかなと思います。

▼富永：お父さんの長時間労働がネックになって、妊娠・出産にあまり協力できないからとか、逆に働いている女性が自分のキャリアを中断したくないからとか、今回は妊娠・出産については控えるという判断を行うなかで、子どもを産み育てるということが働くこととセットになっているというような状況が複数回ありました。その生活状況の中で子どもが産まれてくる、それを意識的に取り上げた、ということになるのでしょうか。

▼鈴ノ木：意識的に漫画にしようと思ったことはないですね。そこを意識して描こうと思ったわけではなくて、息子がいるということが、どれだけありがたいかということを感じてもらえたらしいと思ったのがスタートだったと思います。

僕、出産に立ち会ったんですが、それまでは、なんとなく妊娠してお腹が段々大きくなって、お腹も動くのですが、本当にいるのかなくらいで、出産の時に初めて息子を見た時に、本当にいたんだみたいな感じだけど、彼女が産気づいて、お産直前まで、こんなに苦しんでいる人間見たことないなと思って、ちょっと感動しました。一生奥さんを大事にしようじゃないんですけど、彼女が幸せに暮らせるような協力がしたいなと思ったのは事実ですし、出産を描くなら、奥様ありがとうとか、そういう感謝の気持ちと息子がいることが当然じゃないんだということを読者に伝えられたらなど純粋に思っただけですね。だから連載をしようと思って始めたわけではないので、その短期連載の4回で、そう感じてもらえばいいなと思って最初はスタートさせたということです。

▼富永：なるほど、ありがとうございます。愛読されてらっしゃる方もオンライン上で多く参加されていると思いますが、妊娠・出産というのは病気じゃないから産まれて当たり前というメッセージが繰り返され強調されるし、それが最後まで続いていくテーマ、メッセージかなと思いながら私は読ませていただきました。やはり出産の場に立ち会われたり、息子さんが日々成長していく過程と一緒にしながら、そのことを確認していった、ということになるのですか。

▼鈴ノ木：そうですね。自分が思っていたものと違ったんですよね、なんか戦場みたいな感じで、助産師さんと産婦人科の先生が一生懸命やって、生まれた息子が、なんか赤ちゃんって産まれて、ピカピカで「あっ、赤ちゃんだ」と思うけど、ぼく第一印象が「汚ったねえな」だったんですよ。こういうのが出産なんだと思って。そこから綺麗にしてもらって初めて息子を抱いた時のことは今でも思い出しますし、必ず息子の誕生日には、その時の話を、もう13回、話をして、もう最近ではウザがられています。でもそれは毎年、息子には伝えようと決めていることなので、誕生日には息子が産まれた時の話はしています。

▼富永：振り返っても、私が産まれた時の話を親にされたことはないなと思ったんです。必ず私たちは妊娠出産のプロセスを辿ってこの場にいるわけです。このプロセスを辿らなかったということはありえないわけで、それがいったいどういうものなのかということを多くの人たちが知らない。そういう意味でこの「コウノドリ」というのは、説教臭くなく、なるほど、こういう妊娠・出産のリアルな姿を理解できるので、大変多くの方に読まれてきたのかなと思います。

今、ご家族の話やお子さんとの関わりや、鈴ノ木さん自身がご家族に心配されながら、2時間半の睡眠で7年半の連載をされてきたということをお伺いしてきました。このことについて、3つくらいの質問をさせていただきたいと思います。

1つ目がまず「女性活躍や男性在宅ワークの推進というのは、どういうふうに考えていいらしいのか」というご質問です。質問されているご本人は、子育て期に男性でも女性でも誰かが子どものいる時間に在宅するほうが良いというふうに考えてらっしゃって、とりわけこの妊娠・出産・育児を行う働く女性たちも、一旦仕事を離れざるを得ないという状況があると。この方はまさに、在宅ワークとか、テレワークとか、そうしたものが進めば、女性の継続就労が可能になっていくんじゃないかと書いてくださっています。その裏側には、仕事と生活の場所が一緒になってしまって、振り返ると落ち着かない家になってしまったというふうにも書いてくださっています。あちらを立てればこちらが立たず、みたいな状況をどういうふうに考えたら良いですかというご質問ですが、いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：どうなんですかね。女性は積み上げたキャリアを、出産で離れなければいけない。それで育児をしたりすると、長い間離れなければならない中で、在宅で仕事ができるというのは、僕は良いことだと思います。なんとなく仕事と育児が混合になるということを気にしているのは、おそらくお母さんであって、子どもは単純に近くにお母さんがいたり、お父さんがいたりというのは、良いように感じると思うんですね。だから自分が申し訳ないと思う必要もないし、仕事がある時は仕事があるんだよと子どもに伝えれば、子どもはそれで感じると思いますし、プラスお父さんが育児休暇を取れるのであれば、僕はぜひ、会社が父親に向けてのサポートをしてほしいと思います。

育児はできる時間が決まっているじゃないですか、0歳の時は1回しかないし、1歳の時はもちろん一度しかない。その時間

を子どもとどう過ごすかというのは、1回しかできないので、ぜひ父親も一度育児休暇を0歳の時に味わえば、その後の子どもとの付き合い方が変わってくると思うんですよね。女性にも働くチャンスがもちろんあるべきだと思いますし、男性も育児に参加して、面白いなと思う機会があるようになれば良いかなと、仕事をしながら思っています。

▼富永：ありがとうございます。実際、お子さんの育児というか、鈴ノ木さんの働き方の場合は、そんなに食・住がしっかり分離されているわけではないと思うのですが、身近なところで息子さんの成長を見てきて、良かったと思われたことはありますか。思い出みたいな。

▼鈴ノ木：思い出というか、かわいいなと思って寝顔を見て、保育園から小学校1年生になって、あっ、寝顔まだかわいいなと思って、それから上級生になって、寝顔まだかわいいなと思って、最近中学生になって見ても、まだかわいいなと思っています。

僕は本当に忙しかったので、息子にお願いするようなことしかありませんでした。例えば、どうしても原稿が間に合わない時は、息子に「悪いけど今日あそこの焼き鳥屋に1人で飯食いに行ってくれない」「ああいいよ」と言って、彼は1人で行きます。お店の人も何を食べるか知ってくれているので、彼はご飯を1人で食べて、スタッフ皆のお土産を買って仕事場に戻って来るみたいな。そういう生活だったので、それが良かったかは分からないんですけど、彼の成長にとっては、僕は良かったと思っていますし、わりとそういうところは、まっすぐに育ってくれているので、ありがたいと思って、基本的に僕のほうが育てられている感じですね。

▼富永：ありがとうございます。子育てをしてるというか、親も育っている、親も親になっているという。

▼鈴ノ木：そうですね。僕は子育てするのは初めてなので、合っているかどうかは分からないですし、そんな感じで、常に息子には教えてもらっていますね。

▼富永：ありがとうございます。今のお話を伺いながら、私の父によく、「ずっと寝てればいいのに」と高校生くらいの時に言われたのを思い出しました。起きて口を開けばうるさいことしか言わないから、ずっと寝顔を見せとけ。

▼鈴ノ木：ちょっと髭とかも生えてきたんですけどね。その産毛をちょっと撫でて、いいねーとか、寝顔を見てますけどね。

▼富永：面倒くさがられることはありますか。

▼鈴ノ木：面倒くさがってますね、べたべたするので。

▼富永：鈴ノ木家の日常が垣間見えたんじゃないかと思います。あともう2つ、このことについて、ご参加の方からです。「大人がよく女の子らしくしなさいと言いますが、正直不適切だと思います。ですが社会的にマナーなどは身に付けてほしいと思っています。これはどのように声がけしていくべきだと思いますか」という質問です。鈴ノ木さんのお子さんは息子さんなのですが、例えば男の子らしくしなさいというのはどういうことなのか、どのように声がけすればよろしいですかという質問です。

▼鈴ノ木：僕はあまりそういうことは言わないんですけど、子どもの時はもちろん両親に言われました。「男のくせにいつまでもメソメソしてんじゃない」とか言うんですけど、僕からしてみれば子どもの時、例えばうちの両親が喧嘩をして、お父さんが新しい車を欲しいなと言った時に、ダメとか言われると、お父さんもけっこうメソメソしているんですよ。だから男もメソメソすると思っていたので、メソメソするなと言われると、子どもも意外としんどいですよね。だからもっと違うように育てられればなと思います。

これは僕の個人的な意見ですけど、僕は子どもと話をする時には基本的に子どもに良く喋らせるようにはしています。腹が立った時には子どものほうに喋らせ、何に腹を立てて、言うことを聞かないのか。特に男らしくとか女らしくとか言われると、子どもには分からないし、しんどいので、極力そういう言い方はしないでおこうと心がけています。自分が嫌だったので。

▼富永：なるほど。男らしくしなさい、女らしくしなさいというのは、具体的にどういうふうにお考えですか。

▼鈴ノ木：そうですね、僕もすごく女らしいですし、メソメソしますし、泣いちゃいますし、女人のほうがむしろ強いですね。それは男らしいというのとはちょっと違うと思うし。

▼富永：具体的に、例えばメソメソするなとか、元気にやれとか、わざわざここに女らしく、男らしくという言葉をのせる必要がないのかもしれませんね。

▼鈴ノ木：そうですね。そうしましょう。

▼富永：はい、そうしましょう。このことに関わって最後の質問です。「職場や家族の関係の中で、とりわけ男性側からジェンダーというか、女らしくしなさいとか言われても、今さら驚かないけれど、同性同士の関係の中で少しぎすぎすしたものを感じてしまう。例えばママ友とかの関係の中で、とても居心地の悪い思いをすることがあると、最終的にそれでも自分は自分と割り切ればいいのでしょうか」というご質問です。

▼鈴ノ木：割り切ったほうが良いですね。それで合わない人だったらだんだん距離をおけば良いし、それができないのであれば、自分は自分だし、急には変えられなくても少しづつそういう方向に自分を変えていけば良いかなと思います。同性同士というのは、僕もそうですけど合わないと思ったら合わなかつたりするので、それはもう自分らしくいってほしいですよね。無理は体に良くないと思います。

▼富永：パパ友とかいらっしゃるのでしょうか。

▼鈴ノ木：2人ほどいますね。人見知りなので、お父さんの会とかに参加できない部分がありまして、照れくさいですし。皆言わないんですけど、「コウノドリ」の作家さんというのがひしひしと伝わってくるし、僕ももともとバンドマンのダメおやじなので、そこらへんとかを勘違いされてしまうと、ちょっと行きづらくなって。仲のいいお父さんは、保育園の時に、保育園に迎えに行く前に公園で缶酎ハイを飲んでたお父さん。あっ、この人とは仲良くなれそうだと思って話しかけたら、仲良くなって。そんな感じなので僕自身は、皆さんと仲良くできない部分も多少あります。

▼富永：なるほど。ご質問された方も、自分は自分というふうに割り切ればいいのでしょうかというご質問でしたが、鈴ノ木さん自身が、自分は自分で。

▼鈴ノ木：そうですね。そういう感じであると思います。

▼富永：ありがとうございました。この方、職場や家族から性別に基づく押しつけみたいなものがあっても、もう驚かないという若干あきらめてしまっているという感じもあるのですが、例えば、一緒に住んでいればご家族の中で価値観の違いみたいなものもあるのではないかなど想像します。そんな時はどんな対応をされていますか。

▼鈴ノ木：それは、尊重はしますよ。ただ、間違っていると思う時は、なんでそう思うのかとは聞きます。例えば、今あまり言つてはいけないのかもしれないんですけど、息子がおかまみたいな漫画を読んだ時に、そういう人のことを気持ち悪いと言ったことがあって、その時うちの奥さんがすごく怒ったんですよ。彼女にはそういうお友達もたくさんいるし、息子もそういう友達と実際仲良いです。ただ、それとこれとは彼の中で一緒ではなかった。そういう時、うちの奥さんは息子に丁寧に説明していました。「いろんな人がいるし、何々君だって、彼は男だけど男の人が好きなんだよって。でもそれって変なことではないし、それを変だとお前が決めつけるならダメだって。いろんな人がいるんだと理解して、それでも納得いかないんだったら私に説明しなさい」みたいな感じで怒ったことがあります。それから彼は理解して、別に不思議だと思わなくなりました。

その時に、ちゃんと向き合わないとダメだという気はしました。だから、うちは基本的によく話をするとだけなんですが、それが良かったかなと思っています。ただ、僕も奥さんも喧嘩をすることはありますし、そういう時は極力すぐ仲直りをして、またすぐ話せるようにしています。一度、喧嘩をした時に、うちの奥さんが無視するようになったんですよ。それで僕がお願いをしまして、朝の挨拶とか、おはようって言ったら、おはようって言ってくれと。挨拶すると、ごめんねって言いやすくなるじゃないですか。それはもう絶対的なルールにしてほしいと言い、決めまして、家族3人、「違うと思うよ」と話し合う関係ではあるかなと思います。

▼富永：家族は言葉にしないでも分かり合えるみたいに言われたりしますが、実際はそうでもなくて、違う生き物ですものね。

▼鈴ノ木：言わなきゃ分かんないよ、ということですね。

▼富永：そういう意味では、最低限、親しきなかにもなんとやら、ということですね。レイン坊から何か質問ありませんか。

▼レイン坊：質問というか、腑に落ちたなというのがあるのは、「コウノドリ」をずっと読んでいて、一番最初に富永先生が「説教っぽくない漫画だよね」という評価をしましたよね。なんでそういう漫画ができたのかなと考えると、説教というのは誰かが一方的に、これだめだよねっていうものであると。「コウノドリ」ってあくまで、主人公のサクラ先生も医療スタッフが寄り添って話を聞いて、理解したうえで、どうするのかを考えている。それってやはり鈴ノ木家で、お子さんの話をちゃんと聞いて、じゃあ旅行に行こうかというように、家族で話を聞いたり、お互いの仕事をどのように調整するかを話し合って、うちの家族はこうしようと決めている。そういう普段の姿勢から、この作品の独特の味わいというか、良さが出てきたんだなというのを、すごく今、腑に落ちて、感動に包まれています。

▼鈴ノ木：レイン坊くんありがとう。

▼富永：一ファンからの意見みたいになりましたけど。うまいことまとめていただきました。私たちが何か表現したり、外に発信する時には、ロボットではないので、裏側にある経験というのが乗せられたり、その生活環境の中で、思われたことや考えられたことというものが反映されて行くのかなと、今のレイン坊の話からも思いました。

次に「コウノドリ」誕生の秘話ということで、実際、産婦人科医の方に聞き取りをしていることですから、それまで妊娠・出産なんてことを知らなかったということですよね。私もこの「コウノドリ」の漫画から初めて知ったことがたくさんありました。知らなかったことにすごく詳しくなられたのではないかと思うのです。その中で、どんなことを感じられたか、描いていくプロセスの中で、それまでそう思っていなかったけど、こんなことを考えたとか、こんなふうに思ったとか、ご自身の変化とかがあれば是非教えていただきたいです。

▼鈴ノ木：そうですね、シリーズを描くごとに、僕も本当に初めて知るようなことばかりで。「コウノドリ」の描きたたというのは、一つのシリーズが終わったら次のシリーズに行くっていう形で、その時に話を聞いて調べたりして、そのシリーズを描いていくという作業です。

最初は、逆子の帝王切開から始めたんです。うちの奥さんも最初逆子で、大回転術を受けるために入院するって言われ

て。でも回転させる直前で息子がおなかの中で戻って、その回転術はなくなつたんですけど、どうして逆子で帝王切開になるのだろうというところも分かりませんでした。それならまずそこから1話目にしようということで読み切りの1話目にしました。無脳症は、産婦人科の先生に何もできない症例を出そうと言われて。例えば、18トリソミー（エドワーズ症候群）というのは、今は医療も進みましたし、7・8歳、それ以上生きる子もいます。ただ無脳症というのは大脳皮質形成不全症という病気で、それだけは産まれて数時間、もっても1日とか2日と言われ、そんなこともあるんだみたいなことですし、風疹の話も聞けば、自分も風疹の抗体検査をしなければだめだなと思って、風疹の注射を打った時の清々しさとかが自分の中にあって。それを漫画でどう伝えようかなというのを、一つひとつ分からることを勉強していって、自分も体験したり、帝王切開を実際に見学させてもらったりしました。産婦人科の先生は妊婦さんが不安にならないように、明るく話しかけたりするのですが、やっていることはもう手術なので、筋膜を1枚ずつ切っていって、それを間近で見たら、すごいなと思って。ここでやっていることは僕だったら無理だなと思いました。だから一つひとつ感じたものをどう漫画に伝えられたら良いかなと思って描いています。そういう目で見たり、匂いで嗅いだものを伝えていけたというのは、本当に産婦人科のいろいろな先生に協力をいただいて、描かせてもらった漫画なのだと思います。NICUに行った時も、自分の知らない、自分の息子とは違う状況で産まれた、例えば早産で産まれてしまった両親の顔とか、赤ちゃんの姿というのは、本当に厳しいものもありますし、子どもの成長に一喜一憂する両親もそこにはいます。それはこの漫画を描かなかつたら見えることではなかつたことを目にして、特にそれを物語にできたというのは、僕は本当に幸運者だったなと感じて、32巻まで続けさせてもらったというのはあります。

▼富永：やはり鈴ノ木さんの視点からインタビューされて、先ほどの男らしさ女らしさに関わりますけど、産まない性としての男性の視点からなので、多分男性側も、より理解がしやすいというふうになっているのかなと。

▼鈴ノ木：男性誌でもあったので、もちろん男性の人に響いてほしいというのはあったと思います。

▼富永：なるほど。ありがとうございます。まだまだ盛り上がりそうな感じですが、先に進ませていただきたいと思います。「コウノドリ」の25巻、トラック69で、彼女らの妊娠・出産をめぐって、同性愛がテーマに掲げられています。女性同士のカップルを含めてですが、その後にも多様な性というのをわりと意識的に取り上げています。取り上げたきっかけとか、取り上げてみてどうだったかということについて、お話ししていただきたいと思っています。

▼鈴ノ木：取り上げたきっかけは、取材の中で、立ち合いもさせてほしいという時に、登場しているレズビアンのような2人というのは、けっこう来たりするという話を聞きまして。僕のゲイのお友達とかにも聞いたりして、子どもは欲しいと思うことはあるけれど、実際に育てることになった時に、子どもも成長するし、それをどう伝えたらいいのか分からないとか、ただ子どもが欲しいと思うことは、やっぱり多かれ少なかれあるということを聞いて、それだったらちょっと描いてみたいなと思ったんですよね。

▼富永：なるほど、だから「同性のカップルが子どもを欲しいことは不思議なことではないからね」というふうに鴻鳥先生が冒頭に言って、エピソードが始まっていくということですね。「コウノドリ」25巻の中で、レズビアン・ゲイについて、それぞれからだの性、こころの性、好きになる性が、ゲイの方が男でレズビアンの方が女、表現する性はまさに人それぞれ、というふうに「コウノドリ」の中で説明がされています。

もう一つ、トランスジェンダーについては、上からからだの性、こころの性、好きになる性、表現する性などなど、一度、私もこれいろんなところで説明する時に、一旦は便宜的に説明しようと思って並べてみるのだけれど、これでも説明しきれないというのが、しばしばなんですね。

▼鈴ノ木：そうですよね。本当に幅広いし、僕が調べていた時は、Qというのがあまりなくて、トニー（富永さん）に言われてみて、表現できないみたいな感じが、なんとなく僕の中でしっくりきました。LGBTQっていうと、それは本当に幅が広いので、説明は難しいと思いますよね。僕は別に漫画家ですけど、トニーみたいに大学の授業でどう説明しようかとなると、僕も説明できないと思います。

▼富永：よく分からないものを理解しようとすると、分かりやすく説明されがちです。でもそれは完璧に説明できないもので、説明しようとしても説明しつぶせないものがそれなりにあって、理解しようと思っても、理解なんてできないというものがある。それはセクシュアル・マイノリティとかLGBTとかだけではなくて、異性愛者同士も理解し合っているかというと、必ずしもそうではないと。

▼鈴ノ木：そうですよね。男女間でも理解し合っているのかと思う時ありますからね。

▼富永：先ほどからこのトラック69の話をしていますが、取材の過程の中で、そういう話を聞かれたということでした。主な登場人物は、リョウちゃんとケイちゃんはパートナーで、キョウスケさんが精子提供するというふうな。詳しくは25巻をということにさせていただいて、こういう関係が登場するということです。先ほど鈴ノ木さんもおっしゃいましたが、リョウちゃんとケイ



ちゃんが、トラック69の中で、自分たちがレズビアンだという場面はないんですよね。しかしながら、客観的な状況から考えておそらくそうではないかと。これが実際の産婦人科の場面でもしばしば起こるということだと。

▼鈴ノ木：そういう話は聞きますね。

▼富永：必ずしもそういう場面で性的指向が直接、明かされるわけでもないけど、おそらくそうなんじゃないかと。

▼鈴ノ木：そうですね、産婦人科の先生も想像でしかないことではあると思います。

▼富永：この回の中では、こうした3者の関係を巡りながら、パートナーシップやLGBTについてあえて説明するところなどですとか、養子や里親の制度についても紹介がされています。実際このようなことがあるのかと、取材の中で思われたということですが、取り上げてみていかがでしたか。

▼鈴ノ木：難しかったというのもありますが、それはLGBTのシリーズに限らず、僕の漫画のスタンスとして「コウノドリ」という漫画は、皆に読んでくださいという漫画ではないと思っています。もちろんつらい経験をした人はいるわけで、そういう人に読ませる漫画でもないと思うし、ただ読んでもらった時に違うと思われると僕もつらいですし、つらい経験をした人全員に、そうだと思わせるのは無理ですが、極力そうだと思う人が多いような描き方をしたいという思いがあります。このLGBTのシリーズも直接、同性同士で赤ちゃんを出産したという方には会ってはいませんが、僕の想像の中で、僕の飲み屋の知り合いのゲイやレズビアンの方に話を聞いて、それを彼や彼女らが読んだ時に違うと思われないように、こんなことは無いとか思ってほしくないという思いで描きました。それを読んでもらった時に面白いと言ってもらったので良かった、とホッとしたというのが近いですね。

▼富永：レイン坊がしゃべりたそうですが、いかがですか。

▼レイン坊：私(飛嶋)もこれを読んでみて、私も戸籍上は女性のパートナーがいる、この登場人物と同じような関係ですが、違うと思うことが一つもなくて。私たちは子どもが欲しいという段階ではありませんが、持ちたいと思った時にこうなるのかなという未来が描けて。すごく丁寧に取材されているし、すごくリスペクトされている。世の中には1人もレズビアンという名前の人も、ゲイという名前の人もいません。その人はその人の名前で生きている。個人のキャラクターと、でもそれはあってもレズビアンだったらこうすることあるんだろうなという落としどころが上手くできていると思いました。一点気になったのが、家族の範囲をどうするかという話で、最終的にこの話では、精子提供者の方が、すこし距離を置いた形で終わるというエンディングになっていると思いますが、実際の家族では、提供者の方とも仲良くするというカップルもいますし、もちろんそうじゃないというカップルもいます。今回、距離を取るという話にした理由は、何かあったのですか。

▼鈴ノ木：僕の中で漫画は、読者が想像する先があると思っています。彼に一旦距離を置かれたとしても、この後、人として距離を詰めていくことはできますし、生まれた子どもが、自分の父親は誰だろうと思った時に、それを知ってやれる関係にこの3人が気づいてくれたらいいという願いもあります。キヨウスケさんはピアニストで、ピアノしか教えられないけど、それができたらいいと彼の中で願望があって、その中で生まれてくる子どもと、女性同士のパートナーとの関係を、僕も読者と同じように先を想像して描いています。最初からそれがまとまっているということは、少し違うと思って、人間関係はマイナスから始まることもありますし、それがプラスに変わってくれたら良いという願いもあるので、あのようなラストにしました。

▼レイン坊：本当にそのような余韻を残したラストでした。選択家族と言って、血縁ではなくて、自分で自分の居心地のいい人間関係を作り、それを家族とするという考え方方が広まっています。この3人が今後どうなってくのか、この3人がどういう家族を作っていくかとか、ある意味自由を持たせて描いたところがこの結末の理由だと納得しました。

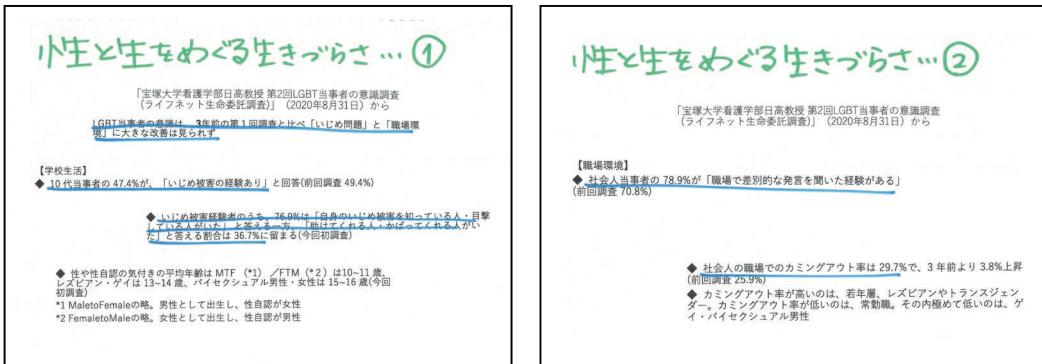
▼富永：そういう意味では、このLGBTの回に関わらず、「コウノドリ」の全てのエピソードが、絶妙なタイミングの余韻を残して終っていますね。

▼鈴ノ木：それは本当に心がけていたことで、できれば全ての話に余韻を残して、死産を迎えた妊婦さんも、何かしらその先に希望や光があったほうがいいし、そこには無いかもしれないけど、読者が読み終わった時にそれを感じられるくらいのラストを目指していたのは間違ひありません。

▼富永：そういう意味では、「同性愛」というのがトラック69に付けられているタイトルですが、この同性愛も含むセクシュアル・マイノリティの今後というのが、希望があるような余韻を残して、新しい関係の作り方みたいな話に展開していくように、読者としては思っていくわけです。パートナーシップ制度の紹介も、この回の中では行われていますが、例えば10年、20年前は、パートナーシップ制度など誰も想像しなかったわけで、そういった意味では日本の社会もずいぶん変わってきていると、希望も含めてですが私も思っているところです。

最後に、希望を確かなものにしていくには、まだまだいくつか課題があるともご紹介したいと思います。性と生をめぐる生きづらさとしていますが、これは宝塚大学の日高先生が行った調査です。LGBT当事者の意識は、3年前の第1回調査と比べても、いじめ問題も職場環境も大きな変化が見られていない状況があります。学校生活では、10代当事者の47.4%が、い

じめ被害の経験があると回答しています。したがってLGBT当事者の2人に1人は、いじめ被害の経験があるということです。また、いじめを受けているということを知っていたけれど、助けてくれる人、かばってくれる人がいたと答える割合は36.7%で、知っていても知らないふりをしているという人が、それ相当いるという状況があります。職場環境については、社会人当事者の78.9%が職場で差別的な発言を聞いた経験があると答えています。社会人の職場でのカミングアウト率は29.7%で、無理にカミングアウトする必要はないが、言いたくても言えない状況がまだまだあるということです。



「コウノドリ」で描かれるのは、妊娠・出産を軸にしながらそれらを取り巻く関係ということなので、学校や職場がクローズアップされることはないですが、こういうセクシュアル・マイノリティをめぐる状況について、鈴ノ木さんは、このデータを見て思われたこととかありますか。

▼鈴ノ木：個人的な意見になりますけど、例えば、パートナーシップ制度が、果たしてそれが今、良い制度なのかと問われると、分かりません。まずその制度を作る前に、土台をしっかりとしないと作る意味が無い。職場での上司の理解であったり、男性への理解だったり、女性への理解だったりというのは、なんとなく僕の経験では、女性はわりと受け入れる人が多い感じがしますが、一般的な男性は自分に無関係だと思う。その考えをどうにかしないとパートナーシップ制度は意味が全くないと思っています、学校でもそういった教育をしてから、最終的なものがパートナーシップ制度だと思います。まず理解をしてもらえるかです。

僕の中ではゲイの人でも嫌な人もいい人もいますし、それは障がいをもっていても、いなくてもいるじゃないですか。皆いい人ばかりじゃないし、悪い人ばかりではない。その中で、人としてどう付き合うのかというものが、しっかり教育だとか職場だとかであった時に、このまちで生まれて良かったな、育って良かったな、生活して良かったなど、そういう方々が思えるようになった時に、初めてパートナーシップ制度というのが意味をもってくると思っているので、わりと今の状況は順番が違うと個人的には思っています。だからそういうことをしっかりと固めたうえで、制度を出すなら賛成だと思いますが、例えば欧米ではとか、杉並区ではとか、に影響されて出すパートナーシップ制度は意味が無いと個人的に思っています。

▼富永：ありがとうございます。制度なので、それを確かな意味のあるものにしていくようなことも並行して行っていかないといけないということですよね。上から下に下りてきたような制度がいきなり現れたところで、これが本当に理解につながるようなものになっていくのかと。

▼鈴ノ木：以前トニーと話をした時に、本当はそんな制度はいらなかったという意見もあると聞き、すごく理解できたり、それは当然だと思います。ずっと密かに生活してきたのに、それを突然パートナーシップ制度みたいなことを言われるのは、少し違和感を覚えるのは当然です。そういう状況の中では、制度としてもしっかりと、皆の理解もしっかりとというように思います。

▼富永：最後に一つだけ参加者の方からの質問です。LGBTQなど、性という考え方方が多様化している中、「男女共同参画」という言葉自体が、男女に性を限定しているようで時代に追いついていないように感じます。男女共同参画に代わる新しい名称についてご意見をお伺いできればと思います」というふうに、この方は男女共同参画という名称の変更が必要ではないかということですが、鈴ノ木さん思われるることは。

▼鈴ノ木：「人間」でいいんじゃないですか。ざっくり。男だから女だからというふうな付き合い方というのは、段々少なくなってくると思いますし、男性も女性も能力のある人はたくさんいます。男とか女とか、これからどんどん少なくなってくると思います。ただ役割は、例えば出産やお産など、多かれ少なかれ出てくるので、それを男性・女性がどう理解してサポートして、今よりもっといい生活の方向に向いていってくればいいと思っています。

▼富永：そもそも、男女共同参画というのが日常語ではないですよね。日常的に「それは男女共同参画じゃないよね」とかは使いません。ご質問の方も書かれているように、英訳はジェンダーイクオリティなので、「ジェンダー平等」というのが直訳です。90年代後半に男女共同参画に関わる動きが始まった時に、なぜ男女平等とか、性差別禁止という言葉を使わないのか、という議論がありました。なんとなく分かっていて分からぬような言葉になってしまっているようなところがあります。「コウ

「ノドリ」を読んでいくと、私たちのライフは、冒頭でご紹介しました8つの役割を担いながら、複数で構成されていくわけですけど、まだまだ、男女で違うように経験されていると思います。そういう意味では、もう少しだけ男女共同参画というか男女平等という言葉は大事にしておかないと、問題がしっかり解決できるか不安になります。

漫画の中でも描かれていますが、妊娠・出産を多様な人たちが経験をしていて、その中で自分のキャリアや仕事とか、さまざまな生活環境や体のこととかに合わせながら、いろいろな葛藤を経験していきますよね。それも裏側にあるのは、男女間の違いで、それを解決するというのは、もちろん最終的には人というものに向かって行かなければいけないと思います。もう少し解決の道筋みたいなものを、しっかり議論したほうが良いのかなと思います。

▼鈴ノ木：そのきっかけとして、分けることに意味があるって、面白いですね。

▼富永：だから、日本女性会議です。

▼レイン坊：お二方、素敵な時間をありがとうございました。これで第1部は終了します。

【第2部】

▼司会(レイン坊)：この分科会では、最初に第1部で話したことの振り返りを行います。その後で、皆さまからお寄せいただいた質問をもとに、トーク形式で、家族やパートナーシップ制度などについて話していきます。では、第2部からご覧の方もいらっしゃいますので、自己紹介をお願いします。

▼鈴ノ木：こんにちは。モーニングという雑誌で「コウノドリ」という周産期医療の漫画を連載していた鈴ノ木ユウです。第2部もスマイルで頑張ります。よろしくお願ひします。

▼富永：はじめまして。山梨県都留市にある都留文科大学で働いている富永貴公と申します。ジェンダー・セクシュアリティに関わる学校以外の場所における教育や学習を研究テーマにしています。今日は90分という限られた時間ですが、参加者の皆さまの声を質問という形でいただいているので、鈴ノ木さんにどんどんぶつけていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

1つ目は、第1部とも重なる部分がありますが、女性同士のカップル、多様な性や多様な家族というのが、この「コウノドリ」の中では複数描かれています。その中でも女性同士のカップル、多様な性を描かれた理由と、感じられたことを鈴ノ木さんから、お話しいただけますでしょうか。



▼鈴ノ木：最初に話を描こうと思ったのは、午前中と重複しますが、産婦人科の先生に、妊娠した時に友達が毎回付き添いで来て、妊婦検診を受けて、そして立ち合いも一緒にさせてもらえませんかということが、多々あるという話を聞いて。先生はそこで「レズビアンのカップルですか」とは聞かないけれど、おそらくそうなんじゃないかというので、それを漫画に描けたらいいと思いました。それがLGBTを調べようと思ったきっかけにもなっていますし、上手に描けたらいいと思って描いたシリーズです。

▼富永：ありがとうございます。描かれる前はセクシュアル・マイノリティとか、そういったテーマをよくご存じではなかったんですか。

▼鈴ノ木：友人は多かったですが、あまりそのように分けて付き合ってはいなかったです。たまたま友人の彼が、男性が好きとか、ゲイであるとかいっても、それはただの友人として付き合っていたので、彼が性的マイノリティーとか、マジョリティーではないとかといった付き合い方はしていませんでしたから。そういうふうに分けられているということも気づかなかつたというのが正直なところです。もちろん彼らは彼らなりに、家族に言えないとか、不安や悩みを抱えていたけれど、そういうふうに区別されているんだと実感したのは、このシリーズを描こうと思ってからですね。



▼富永：身の回りに当たり前に、セクシュアル・マイノリティ、レズビアン、ゲイ、多様な性的指向の方もいらっしゃって、漫画をとおしてご自身もさまざまに気づかれていたということでしょうか。

▼鈴ノ木：そうですね。実は僕が結婚した時の証人ってくれた1人もゲイの方ですし、それがどうこうということで付き合っていたわけでもないです。本当にお世話になった方なので、結婚の証人の1人になってくれませんかという話をして、「もちろんよー」と言って書いてくれました。それが「コウノドリ」にも出ているヒトシさんという人のモデルです。「勝手に殺さないでよー」って言われたけど。

▼富永：なるほど、モデルになられた方もいらっしゃるということで、ヒトシさんって誰だという方は「コウノドリ」25巻をぜひご覧ください。

25巻の内容については細かく話しませんが、紹介されているレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーも含めて、あくまで選択されるアイデンティティーです。取材をされた産婦人科のお医者さんも、おそらく「そうであろう」と思って対応されていたので、客観的に「あの人とあのはレズビアンだ」というのは、こちらから強制的に押し付けるものでもない、ただ妊娠・出産ということに関わってみると、妊娠されている方ではない女性が立ち合いをしたいと希望するとか、そういう現場が生まれてきているということでしょうか。

▼鈴ノ木：そうですね。漫画の中では、どうせ分かることだと思うので、という言い方をして説明をしていますが、そのほうが読者の人に伝わりやすいし、話も書きやすいということでそうしました。でも、なかなか自分たちから先生に知らせるということは、普段はあまりないと思います。

▼富永：なるほど、この後のパートナーシップ制度の話にもだいぶ関わってきますが、医療とか公的な機関において、2者間の関係とどういうふうに向かっていくのかというか、例えば産婦人科の先生の中でも、結婚している夫さんじゃないとダメだという反応もあり得るんじゃないかなと思うんです。

▼鈴ノ木：それは産婦人科の先生によると思います。パートナーシップ制度の良いところは、例えば手術が必要だった時に説明を受けられるとか、良い点もあるとは思います。逆に良い部分でない点、結婚とはちょっと違う形というのは、お葬式に出席させてもらえないとか、遺産の件とかもあると思います。10年、20年暮らしていた夫婦同然の方がそういう扱いを受けるということは疑問な点もありますし、そこをだんだん良いものに変えていってくれたらと思っています。

▼富永：ありがとうございます。午前中も話題になりましたが、「コウノドリ」という漫画の特徴として、命に関わる事柄というのは説教臭くなりがちですが、全然説教臭さがない。あと絶妙な余韻を残しながら、新しい可能性とか希望に満ちた未来とかも予感させるような終わり方をしています。鈴ノ木さんのリアクションの中から漫画の特徴として、なるほど、そうかというふうに、午前中は共有をしました。この「コウノドリ」の中にも出てきますが、息子さんも「コウノドリ」を最近は読まれるようになったとか。

そのことについて3点の質問があります。多様な性にも関わりますが、1つ目、「保育士として働いている者です。性の多様性について、子どもたちに伝えることはありますか。またどのように伝えたらいいですか」というご参加の方からいただいた質問です。いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：保育園の先生で、話を分かりやすく説明しなければいけないというのはあると思うが、話をそらさず、性というものに対しての疑問、例えば自分がどうやって生まれてきたのでしょうか、みたいなことがあったとしたら、素直に話してあげたほうが良いと思います。ちゃんとした説明をどうできるかです。例えば、「生まれてくる道」というものが、うんちが出るところとおしっこが出るところの間にあって、その道が大事なものなんだと、子どもに分かり易い説明を大人がまっすぐにできれば、子どもはそれに疑問を持たないで、性というものを自然に理解できるようになるのかもしれません。実際、難しいとは思いますが、ちゃんと向き合って話をするようにしたらいいと思います。

▼富永：なるほど。息子さんは読まれてみて、お父さんが描かれた漫画について何かリアクションはありますか。

▼鈴ノ木：「けっこうおもろいやーん」って言います。「やるやーん」って。

▼富永：そういう意味でも、とても難しいことを難しいまま描いている、贅否両論あることに下手に決着をつけるというよりは、こういう見方があって、ああゆう見方があってというような。それが素直に入ってくるポイントであるのかなと。

▼鈴ノ木：そうかもしれませんね。でもお医者さんの話なので、大抵のお医者さんは、こういうふうな選択をして、これを患者さんに説明をして、これでいきましょうって言いますけど、患者さんには患者さんの環境もあれば、生活もある。僕の場合は、押し付けがましくなく、お医者さんがどう患者さんに説明できるかなっていうのを目指して描きました。実際のお医者さんは、もちろんリスクのある人には説明しますが、リスクの無い人には丁寧に説明できる時間が無いんです。妊婦さんってリスクがあろうがなかろうが不安なんですね。漫画なので、そのリスクが無い妊婦さんでも不安な部分は漫画で説明できればと思って。実際の産婦人科の先生も、本当は説明したいけど時間が無いという中で、「産婦人科の先生冷たいよねー」という話をよく聞きますけど、それはリスクが無いから説明する必要が無いわけで、ただ妊婦さんは皆不安で、その妊婦さんが不安な部分を解消できる漫画でもあったらいいなという部分はあったのかもしれませんね。

▼富永：「コウノドリ」という漫画が、この言葉が適切か分かりませんが、教材的にもなっていて、多くの方々が愛読をされているのだと思います。今度は「自分がLGBTだと意識した子どもたちにどう対応したら良いですか」という質問ですが、いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：きっとそういうのって、これから作っていかなければいけないことではあると思います。まず、当人には、おかしなことではないし、間違ったことではないとちゃんと知らせなければいけないし、周りの子にも伝えなければいけない。子どもに説明するというのはすごく必要なことです。それをどう説明するのかというのには僕の仕事ではないけど、教育の面でも、保育

園・小学校・中学校でしっかりとやっていく必要があると正直思っています。

▼富永：「性や性自認の気づき」の平均年齢というのが調査データにあります。男性として出生し性自認が女性である、あるいは女性として生まれて性自認が男性である人は10～11歳、レズビアンやゲイは13～14歳、バイセクシュアル男性・女性は15～16歳。全体をみても、小学校の高学年ないし中高生の時に、そうした性や性自認に気づいているということです。とりわけセクシュアル・マイノリティだけではなく、異性愛者も含めてですが、自分が何者かというのを問い合わせる状況において、自分が他の人と違うとか、おかしいんじゃないとかと思う経験とかが、ちょうどその年齢に重なるということになります。可能な限り、それがおかしなことではないというメッセージを発信できればいいですよね。

▼鈴ノ木：そうだと思います。だから先ほど出た僕の結婚の証人になった方は、もう70歳くらいなんですけど、やはり10代の時から自分はおかしいんじゃないかとずっと思っていて。女の子と付き合ったこともありますし、「子どもも実はいるんだ」という話も聞きました。だけどやっぱり「自分はちょっと変なんじゃないかな」と感じながら思春期というか多感な時期を過ごしてしまったというのは聞いていたので、大人が何かしら違うサポートができれば、もっと違ったのかもしれませんと思いました。どんどんそうなってくれたらいいかなとは思いますし、なってるとは思うんですけどね。

▼富永：そうですね。実際、なんだか悪者のように扱われがちですけど、保育の現場でもそうですし、学校の先生たちも意識的に取り組まれていることがずいぶん増えてきている状況でしょうか。

最後に「とりわけセクシュアル・マイノリティだと、他者に承認をされないという経験を重ねていくので、自傷行為や自殺率が高いというデータもあって、そうした支援についてどのように考えられますか」という質問をいただいています。今までのことと関わりますが、鈴ノ木さんのお考えをお話しいただけますか。

▼鈴ノ木：それが理由で自殺してしまうというのは、本当に人生がもったいないし、受け入れてくれない場所にいる必要がないと思います。できれば行政だったらそういう場所を作つてあげても良いと思います。そういう人が集まるような場所でもいいですし、理解してくれる場所でもいいけれど、自分の居場所をちゃんと作つてあげることが大事です。自殺してしまうのはもったいないし、なんか寂しいですよね。

▼富永：そういう意味でも、「コプリズム」という当事者らが立上げた団体が、この山梨県にあるわけですが、こうした団体が第3の居場所というか、家庭にも学校にも居場所がないという状況にある子どもたち、大人に居場所を提供することができるのかなと考えますが、レイン坊いかがですか。

▼レイン坊：そうですね、私たちの団体の交流会は特に子ども向けというわけではありませんが、東京の例ですが、ユースに特化した、大人はスタッフ以外には誰も入れないということで、安全性を保つている集まりの場、にじーずという団体があります。また日本各地で、「にじーずin○○地方」という形で、最近その輪が広がっているので、やっぱりユースにはそういう居場所があるといいなと思います。私はもう大人ですが、大人であっても話題を常に考えるんですよね。好きな芸能人の話でも、私は戸籍上女性ですが女性が好きなので、女性アイドルとか女優の話をしてしまうんですね。でもあんまり言うと「えっ、女性が好きなの」というふうに言われたらどうしよう、そういうつまらない不安で、なかなか本当の好きな俳優の話ができなくて、仕方ないから「大泉洋さんが好きです」とか言います。彼もそれなりに好きなのですが。そういうふうにしてごまかして合わせてしまうみたいなところがやっぱりあるので、ユースにとって、そういう些細な会話を含めて何でも話していくんだよっていう場所があるのは、すごく救いになるんじゃないかなと思います。

▼富永：もう一つレイン坊、先ほど鈴ノ木さんにも質問しましたけど、自分がLGBTだと意識した子どもたちにどう対応したら良いかということで、基本的にはおかしなことじゃないんだよ、ということになるかと思いますが、実際に自分がLGBTだと意識した子どもたちに向かっている人たちに向けて、何かありますか。

▼レイン坊：ここで問題になるのは、意識した子どもたちが誰に相談をするのかということです。カミングアウトされたらず話を聞いて、「この人はこの属性です」と決めつけるのではなくて、まず何に困っているの、何が嫌なのということを聞き出して、そこで現実との落としどころと一緒に探していく作業をすることが大事だと思います。あと誰に言って良いのかということをちゃんと確認をする。親にも言ってない場合、親に言っているが先生には言ってない場合、いろんな場合があるので、そこを確認しながら一緒に考えて行くのが大事だと思います。ただ、LGBTだと意識した子どもは、ほとんど大人には言いません。そういう意味では、先ほど鈴ノ木さんが「周りの友達にも伝えていかないといけないよね」っておっしゃったように、本人が言うかは関係なく、こんな生き方があってね、こういう人もいるんだよ、男性同士でも家族になれるし、女性同士でも家族になれるし、生まれた時の性と違う生き方をする人生もあるし、もちろん恋愛しない人生もあるよっていうのを、真摯に伝えていくことが必要なのかなと思います。そうするとお友達にそういう人がいた時に、「なんだお前そうだったのか」くらいに終わる、というふうになるんじゃないのかな。最初の保育士さんの質問の話になると、私は絵本で小さいお子さんにLGBTについて説明するというような講演を何回かやって、好評をいただいています。そういう絵本を読み聞かせするのも良いし、保育

園に1つ2つ置いてみるというのも、まずは最初の一歩としていいんじゃないかと思います。

▼鈴ノ木：素晴らしいですね、レイン坊ちゃん、勉強になります。なんか僕、子どもだからとかいうのがすごく嫌なんですよ。だから息子には基本的に、とりあえず自分で考えて、やりたいことはやってくれと言う。僕は両親に基本的に周りのことを全部やってもらって、大人になって気づいたら何もできなくなっていて、それがすごく嫌だったんです。物静かな子で、1人じゃ何にもできないの、みたいに言われるのが本当は嫌だった。自分の子どもには、例えばおもちゃが欲しいと言ったらおもちゃ屋に連れてくだけなんですよ。会計はやるけど、どんなものが欲しいのか、どんなおもちゃが欲しいのか、自分の希望は店員に話してくれって。そうすると自分で考えるようになるんですよね。だから今、うちの子は自分の意見もちゃんと言いますし、皆がそうだと言っても、自分が違うと思えば違うと言えます。そういうことができれば、皆で「変だよなああいつ」って、固まることはないと思うんです。何が怖いって、集団になって、何か違うと思う人を皆で攻めたりするのは、すごい残酷。一人ひとり、オレはこれ違うと思うよって、1対1で言えるんだったら、人として話ができるけれども、複数対1人になると、どうしてもそこには公平さはなくなってくるので、そこに向かっての教育だったり、指導だったりというものができればいいかな。

▼富永：鈴ノ木さんがおっしゃったように、自分で気づくとか、自分で考えるということを支えていく。これはダメで、あれはダメでということよりも、むしろ自分の身近な問題として考えて気づいていくという方向性が求められていく必要がある、ということをお話しいただきました。さっきレイン坊からもお話をありました、絵本とかを自分で手に取れば、何か考えるきっかけになるでしょうし、絵本よりは漫画が良いという方は「コウノドリ」25巻を、ぜひ全国の学校に置いてください。漫画のほうが堅苦しい文章を読むよりも入ってくるということですね。あるいは映像とかでも。

▼鈴ノ木：それはあると思いますね。絵本も含めて本当にそうだと思います。

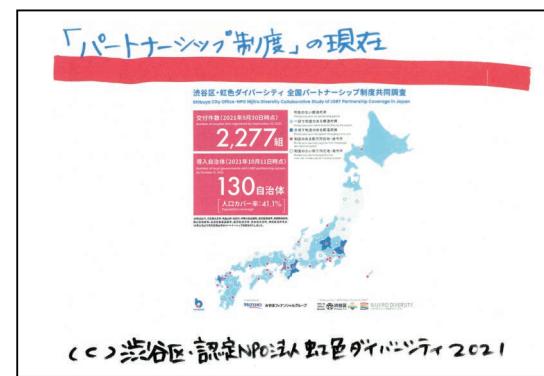
▼富永：続きまして、パートナーシップ制度はどういった意味や意義を持っているか、続けてお話をいただきたいと思います。例えば、生や性の多様性の実際ということで、山梨県内でももうすでにこのパートナーシップ制度の導入決定、あるいは検討しているところがあるということでおろしいでしょうか、レイン坊さん。

▼レイン坊：甲州市が導入するということを市長が表明しています。甲府市では、議会でパートナーシップを導入してくださいという請願が採択されています。あと個々の議員が、県議会・各市議会で質問をして、今後検討していきます、というような回答を得ているところもあるかと思います。

▼富永：パートナーシップ制度について、現況をスケッチブックでお示ししておりますが、渋谷区とNPO虹色ダイバーシティがまとめているものです。10月11日時点では、130の自治体がこのパートナーシップ制度を導入しています。これで人口カバー率が41.1%とほぼ半分に近くなっています。さらに2,277組がパートナーシップ制度を利用しているという状況があります。鈴ノ木さんが「コウノドリ」の中でも描かれておりますが、パートナーシップ制度とは法律婚、いわゆる同性婚とは異なるものであることは、すでに皆さんご存じのとおりです。この法律婚、「パートナーシップ制度」と「同性婚」の違いについても、一覧でお示ししております。

一つずつ取り上げていくと、とても複雑な話になりますので、実態に即した形のパートナーシップ制度だったら、こういう意義があるけれど、やっぱり同性婚じゃないから不十分だというようなところが、随所にあったりするということです。「こうしたパートナーシップ制度には、いまだ法的な拘束力が無いと思いますが、それでも制度が導入されることの意義とその課題について、どのようにお考えですか」という質問をいただいております。鈴ノ木さんいかがですか。

▼鈴ノ木：パートナーシップ制度というものが独り歩きするような形は良くないと思うのは事実で、その制度を作りましょうといった時に、本当に当事者たちが良かったなと思うような形を作らないと。無い方が良かったというものだったら、意味がないと思うので。もちろん必要な部分はあると思うんですね。そういった制度があれば教育でも説明しやすくなると思います。特に、ちょっとずつ形を変えてでも成長していくようなパートナー



法律婚・事実婚（異性間）・同性カップルの比較

婚姻型	法律婚	事実婚（異性間）	同性カップル
婚姻登録	○	×	×
戸籍	同じ戸籍	別の戸籍	別の戸籍
姓	夫婦両姓	夫婦両姓	別姓
住民票の記載	夫（妻）	夫（妻）（未記入）	選択人
市区・協力・扶助義務	○	○	？
直接義務	○	○	？
婚活費用分担義務	○	○	？
社会保険	○	・ 健康保険の扶養家族 ・ 2019年会保険の第3 名会員登録 ・ 運送4台	×
浮気された場合の処理基準	○	○	？
要介護認定の財産分与請求	○	○	？
夫婦としての社会的認知	○	△	×
病院での生会・手術冠名	○	△	△
配偶者扶養（所有分中）	○	×	×
配偶者ビザ	○	×	×
子どもの立派	両出生子	両出生子	両出生子
子どもの親権者	共同親権	親権者（父親に委託するとき親権が失う）	一方のみ
親権者が亡くなるに残されたパートナーが子どもの親権者になれるか	○	△ (親権者変更手続き必要)	× (遺言で未成年者を見扱うことは可能)
法定相続権・遺留分	○	×	×
相続税の控除軽減	○	×	×

松岡宗嗣, HUFFPOST
(2018.9.21)

シップ制度を始めるっていうふうになれば、改善するものは改善して、独自の制度になっても良いと思います。そういう器用さを日本人は持っているので、その場所に合った制度のほうが良いかなと思います。東京は東京、地方は地方。地方というのは、それが住みづらくなってしまうということにも直結すると思います。だから、そういうことにどう対応するのかというところまで考えた制度でないと。人が住みづらくなってしまうなら作る必要はないと思うので、より良く住みやすくなつたねっていうのを目指せるなら良いと思っています。

▼富永：なるほど。例えばこのパートナーシップ制度に登録して宣誓したいけど、役所で働いているあの人、向こう三軒両隣だしな、とか。

▼鈴ノ木：そういう状況が、東京と違って起こりうるんで。

▼富永：十分にありますよね。若干柔軟な、その地域の実情に根差したような形のパートナーシップ制度のあり方があると思います。

▼鈴ノ木：そうですね。それが甲府の、甲州でもどこでも良いですけど、地域のパートナーシップ制度の模範になれば素晴らしいと思います。

▼富永：レイン坊からもこのパートナーシップ制度について何かありますか。

▼レイン坊：まず導入することの一つの意義は、「地方にはいない」と思われてしまうことがいまだにあるので、それでも作ったということは、「いるかもしれない」という考え方を、皆さんの中に呼び起こしてもらうことが大きな意義かなと思います。でも、お二方が話したように、役場の人が近所に住んでいて、その人にはれるのはどうかなと思います。私もやっぱり、そのあたりは不安だと考えているので、なるべくプライバシーを守ったりとか、もしくは導入と並行して、そのパートナーシップ制度が活かされる場、医療や役場など、いろんな場所があると思いますが、その職員たちにも、そういう市民がいるんだよということをちゃんと伝えていってほしいです。証明書を提示した時に、なにこれとか、いたんだとか、そういう反応が無く、スムーズに他の異性愛カップルと同じように扱ってもらえるような体制を同時並行で整えてもらえば、私たちも安心して、導入して良かったという制度になるのかなと思いました。

▼鈴ノ木：必要ですよね。親にも知られてないのに、役所の人に知られたらかわいそうですもんね。

▼富永：だから、情報をどれくらい守った形でということもちろんですね。

▼鈴ノ木：それは本当に必要だと思います。

▼富永：全員がカミングアウトしないといけないという社会は、息苦しいわけですから。多くの異性愛者が「私は異性愛者だ」とあちこちで言って回ってないわけで、セクシュアル・マイノリティだからといって、自分がセクシュアル・マイノリティだと言って回らないといけないというのは、これはまた違う息苦しさが。

▼鈴ノ木：だから本当は、そんな制度が無くても生きやすいのが一番いいんですけれどね。

▼富永：本当ですね。最終的にはなくなるという形も想定しながらかもしれません。パートナーシップ制度を巡っては、例えば先ほど病院の話もありましたが、病院によっては、公的な婚姻関係になくても面会が可能だったり、病院ごとに対応が違っていると思います。ただ、制度そのものが私たちの意識を変えていく教育的な側面がかなりあるだろうなと思うんですけど。

▼鈴ノ木：それは間違ひなくあると思います。

▼富永：パートナーシップ制度があることによって、病院の関係者もそうですし、行政の窓口の方々もそれまで想定しなかつた事柄というのが、目の前にいる人の裏側にはあるということを、想像できるようになる。そういう社会的な教育の役割を制度が果たしていくこともあるかもしれないですね。

もう一つご質問があります。「多様な性や家庭を築くにあたり、現在の政府の姿勢についてどう思いますか」。

▼鈴ノ木：政府？そこまでだとちょっと…。政治家の中にもすごく理解のある人もいますし、僕の住んでいる中野でもゲイの方が議員になっていたりします。政治となるとそれだけが全てっていうわけでもないですから、これから日本、そういう問題も含めて取り組む。僕はやっぱり子どもが好きなので、子どもがどう幸せに育つかということに対して、多様な形が増えてきたらありがたいと思います。例えば、極端な話ですけど、特別養子縁組も含めて、同性カップルでも、間違ひなくそれを普通として受け入れるようになれば、子どもはより幸せになると思います。男女の夫婦でなければ、というのは頭でっかちなことであると思うんですよ。だからそういう形に政治も向かっていってくれれば、子どもがよりよく幸せに育つ環境が与えられるチャンスでもあるかと思います。また、そういう子が、虐待を受けることも無いとは限らないので、児童養護施設も含めてしっかり観察するような社会を目指す政治の流れが必要。僕の知っている同性カップルで、長くいる夫婦と変わらないような人たちというのは、本当に穏やかですし、ここで子どもが育っても、曲がるはずがないという確信をもって言えるような2人であったりするの、そこは政治も協力して、子育てを含めた、性的マイノリティの方も一緒に参加できる形があつてもいいと思っています。

▼富永：ありがとうございます。レイン坊も何かありますか。

▼レイン坊：甲府市で同性パートナーシップを市でもやってくださいというのを議会に出して、全会一致で賛成をして、進めて行くように行政に伝えますね、という形でまとまつたんです。やっぱり何か声を一つでも届けて、コミュニケーションを政治家の皆さんとも取っていくことも必要なんじゃないかな。政治家の人も何かを良くしようと思ってなつたと思うので、困っているならじゃあ力になるよって、動いてくれる方も絶対いらっしゃると思います。そういう政治家との対話もしていく必要があるんだろうなというのを私自身も痛感しています。

▼富永：先ほど、「ライフキャリアレインボー」を紹介しましたが、やっぱりどの役割においても、人間が人間らしく、尊厳を持ちながら発達していくことなんだと思うんです。私たちは働きながら自分を発達させて成長させていくわけですし、それは親になりながら、家族を作っていくことも、私たちの一つの成長や発達の大変大きな機会の保障なんだと思います。それをごく一部の人たち、あるいはごく一部の性的指向の人たちだけに保障するというのは、問い合わせられる必要があるでしょうし、そういう不公平さというのがあっても良いのか、というふうな声をあげていく必要がまだまだあるだろうと思いませんが、やはり選挙に行かないでしょうか。

最後の質問です。「私は10年間、同性とお付き合いしていました。その中で彼女の子どもさんと一緒に生活をしていましたが、学校や地域の行事では子どものことを考え、恋人としてではなく、友人としてしか参加することしかできなかつたのが辛かったです。今後の社会で同性カップルは恋人関係など隠すことなく生活を送るには、周囲の理解と何が必要でしょうか、やはり学校で教育の一環に入れていただくことが一番なのでしょうか」。先ほどのことと少し重なつてくる部分がありますが、周囲が理解することと、他には何が必要か、教育か、という質問です。

▼鈴ノ木：間違いなく教育が必要です。本当にそれ辛いと思うんですよね。パートナーに子どもがいた時に、同性だから家族とも言えず、友達ってことで、周りを気にする状況が、とても寂しかつたんだろうなって思います。それをどうしていこうというのは時間がかかると思うんですけど、教育は間違いなくその一つではあるかなと思いますね。あと、さっきも言ったように、住んでいる場所によって、方法って変わってくると思うんですよ。例えば地方なんかですと、近所とのつながりが強いし、パートナーですら黙っておこうと言われてしまうことも出てくる。それが東京では、地方より説明はしやすいとは思うので、教育と皆の理解をどう進めて行くのかは時間がかかることですけれども、大人をどう教育するかという、それも教育なんでしょうかね。だからすごく難しい質問だなあ。

▼富永：難しい質問です。地域の実情を踏まえたうえで、私たちはなんだか普遍的な価値とか、そうしたものを抱えがちですけど、やっぱりこの場で生きている訳なので。地域の状況とか、そこで求められていることというのも、調整を取りながら、実情を踏まえた教育や制度の設計を行っていく必要があるということでしょう。ご質問をいただいた方のご指摘ももちろんですが、何が必要なのか議論していくという場の設定も、細かい単位での地域ごとに必要になっていくのかなと思います。

第1部でも紹介し、先ほど振り返りの時も紹介しましたが、宝塚大学の日高先生の調査によると、当事者の25.1%が「アウェイティングされた経験がある」というふうに回答をしています。身近なところで自分の性的指向や性自認というのをカミングアウトした場合、それを第三者にばらされてしまう、という経験を当事者の4人に1人はしている。アウェイティングした側は、「だって自分に言ってくれたんだから他にも言っていいだろ」くらいの感じで対応しているかもしれません。しかし、性的指向や性自認がなぜこんなに問題かというと、私たち個々の人格や尊厳に、とても心の柔らかい部分で関わつてゐる事柄で、あなたには話せるけども、社会一般に話したいわけではない。そういう意味では、公的な行政機関などでも先ほどMTF・FTMの説明は申し上げましたが、MTFの51.2%、FTMの38.8%が「体調不良でも医療機関に行くことを我慢した経験がある」というふうに答えています。やっぱり病院に行きたくても行けない状況というのは、心と体のバランス、あるいは健康に関わつてることなので、大変大きな問題だと思います。そうした行政機関や医療機関はもちろんですが、何らかの対応というのがパートナーシップ制度をきっかけとしながら、当該自治体での議論を深めていくことが可能かと思っています。

最後にこの調査データからですが、確かに「コウノドリ」の希望ある余韻と同じで、若干世の中の変化の可能性を感じられているところです。当事者の約7割が「5年前に比べて、性的指向や性自認の多様性が尊重される世の中になつてきている」と感じているというデータがあります。過日行われたオリンピックなどを契機に「LGBTへの認識や制度の変化を期待」している声が約8割でした。最後に当事者の約6割が「同性婚(異性婚と同じ法律婚)」を望んでいます、特に若年層にその傾向がより顕著だというデータがあります。確実に世の中が変わっています。パートナーシップ制度を20年前に誰が想像したでしょう。確かに同性婚を求める声はあったけども、人口のほぼ40%をカバーするほどの広がりを見せるとは多くの人は想像しなかつたと思います。そういう意味では最後のまとめに關わつてきますが、今私たちは子どもたちにどんな社会を手渡していくのかというのが、この議論ではとても大事なことかと思います。教育は基本的に先行する世代が次の世代に何を伝えたいかということだと思いますので、このパートナーシップ制度あるいは性の多様性について、「子どもたちにどんな社会を手渡したいと思いますか」を、鈴ノ木さんへのまとめに關わる最初の質問にさせていただきます。

▼鈴ノ木：子どもが大人になるというのは、産まれる場所は選べないので、ほとんどの人が多感な時期にその場所で過ごさなければいけなかった時に「このまちで生きてて良かったな」というか、「あそこで大人になって良かったな」というふうな場所を目指すのが大事なことだと思います。そのあと的人生はそこで決まりますので、良い意味で「本当にあそこで生まれ育って良かったな」という場所を目指すというのは大切なことだと思います。例えば、「今思えばLGBTや性的マイノリティに関するすごい進んでたな」と思うような場所だったら、同性婚を目指しているという若年層の人が増えてることが、だんだん自然になってくるというか、そんな場所を目指せれば、子どもも本当に良い子になると思います。いじめだと、自殺だと聞くのが一番しんどいです。だからそういうことが理由でいじめられるとか本当にくだらない話なので、大人がどんな場所を目指せるように子どもを育てるのかが、これから課題になってきて、その子どもがまた次につなげてくれるという、ちょっと時間はかかりますが、そういうのを目指せればいいと願っています。変かな？

▼富永：全然変じゃなかったです。なぜなら、例えば、結婚をしたいと思わない若者が増えているんじゃないかと思うんですね。ただセクシュアル・マイノリティでは、とりわけ若年層が結婚したいと思っている、あるいは同性婚を望んでいる状況があります。家族形成の機会がそもそも無い、自分は家族なんか作れないと思って自分探しをしていた10代の前半から、パートナーシップや同性婚の裁判なんかを経験してみると、社会の確実な変化を感じて、生きてていいんだなと思える社会になってきているんだと思います。

このことに関わって、2つほど質問をいただいています。「最近になってLGBTQの話題をよく聞くようになりました。その中で私個人としては同様に好意的に考えておりますが、世間ではLGBTQに対してあまりよく思っていないように思う。そこで質問です。LGBTQに対して受け入れられないなどというような状況を変えていくために、どんな活動をしたらいいですか」、多分なんらかの活動をされたい方だと思うのですが、鈴ノ木さんから、こんなことやってみたらどうですかみたいなことがあればどうぞお願いします。

▼鈴ノ木：たいてい理解できないのは男性のほうが多いと思います。僕の個人的な意見ですが、普通の友達と何ら変わらないです。そういう友達がいないから怖いとか、ゲイの人だというと、自分に直接関わって来るんじゃないかとか勘違いしていて、ゲイの人も好みはあるし、好きなタイプはあるし、女性と男性であまり変わらないし、だから人とどう付き合うのかという入り口の部分で勘違いしている人が多いので、人としてどう付き合うかというのが大事だと思います。例えば部長さんとか会社で高い位置にいる方が、人には言えず隠しているけど、優しいし、部下にも信頼があって、自分は本当はゲイだけど言えないんだという苦しさももちろんあって、ゲイだと分かった瞬間、人が変わったように受け入れられないとかはおかしな話です。どんどん自分で知っていくのも、理解できない人たちには大事だと思います。ひょっとしたら身近にいるかもしれないし、最初から拒絶するような形はやめていただきたい。

▼富永：レイン坊さんいかがですか、どんな活動をしたら良いかということですけど。

▼レイン坊：私たちも探りながら活動していますが、鈴ノ木さんが言ったように、知らないから怖いというのは、人間の基本的な感情の持ち方だと思うので、私たちは当事者から年に1回メッセージを集めて、どのように生きているのか想像してもらえるように、メッセージの展示会をやっています。当事者がカミングアウトするというのは、なかなか難しい部分がありますが、そういうメッセージの展示会だと、あとはいろいろな人が個人でどのように生きてきたかということを、ウェブなどで発信しているので、そのようなところから触れてもらえば良いなと思います。行政も個人もそうですが、男だからこうだと、女だからこうだと、行政が考える家族はこういう人たちだからこういうサービスをする、みたいな考えで固まっていたのを、もっと個人へ、個人をどのように支えていくのかというように、考えを変えていくタイミングだと鈴ノ木さんの話を聞きながら思いました。そのような意識をもって、その人が何を思って、何が好きで、何が嫌いで、何をすると楽しそうな顔をするのかという、本当にそこから知り合ってくということが、抽象的な話ですが、これから大事になっていくと思いました。大丈夫ですか。

▼鈴ノ木：完璧だったと思います。

▼富永：もう一つだけ、お2人に今、どちらかというと子どもたちにどんな社会をということをテーマにしてお話を進めてきましたが、「60歳以上は、多様な性について理解不可能な人が多いように思われます。人生100年時代と言われ、60歳以上といつても、まだまだこれから30~40年以上お元気でご活躍いただく社会になっていくことを考えれば、そうした人たちと価値を共有していくためにはどのようにしたらよろしいでしょうか」というご質問ですがいかがでしょうか。

▼鈴ノ木：理解してもらう努力はした方が良いでしょうね。年配の方も理解していると思いますが、自分の息子とか孫とかということになると、別だったりしますし、そこをどう理解させるかは、すごい時間もかかるけど、どう素早く理解してもらうかは、例えば一緒にになにか、お祭りでもなんでもいいと思いますが、一つの目標があってそれに向かって一緒に何かができれば近道だと思います。LGBTQだと分っている人たちとイベントを組むのは大事だと思いますが、そうすると身近なものに感じるし、特別ではなく普通の人と人付き合いになってくる。もちろんぶつかることもあるかもしれません、それすら

も良い結果になればいいかなと思います。だからお祭りでも、60歳以上の人たちとLGBTQの人たちで、なにか一つ形が作れれば一番いいかなと思っています。間違っていません。

▼富永：宣言いただきました。間違ってませんということですが。先行する世代も、私たちにこういう社会にしたいとバトンを渡してくれるはずなので、困らせようと思ってこの社会を渡したわけではないですね。それなりの価値観というか、その世代が感じたこともあったうえでのことだと思いますが、レイン坊いかがですか。

▼レイン坊：一緒に何かするというのは面白いと思います。他の自治体の例で、レインボーフェスタやレインボーパレードというお祭りをしたり、LGBTに対するポジティブなメッセージを発しながら街を歩くというようなイベントを行っています。その時、商工会議所だとか地元の商店街さんとかに挨拶をしたら、多様な性を表すレインボーの旗を振るようになったんだよ、なんて変化を体感したという話を聞きましたので、そういうふうに何かを作り上げるのは、確かに面白いアイデアだと思いました。

あと、一緒に生きているんだという事実から、もう一度進められたら良いと思うし、幸せの形は今いろいろな形があって、子どもを産めば幸せというわけでもなく、結婚すれば幸せということでもない。一人でも幸せな人もいるし、やっぱり家族を持ったから幸せになった人もいるし、それはいろいろなので、あなたの探してきた幸せは間違いではないけど、今はもっといろいろな幸せがあるんだよという対話もできたらいいなと思いました。

▼富永：鈴ノ木さんもおっしゃいましたが、理解しなければと思うより一緒に楽しまなきゃということですね。

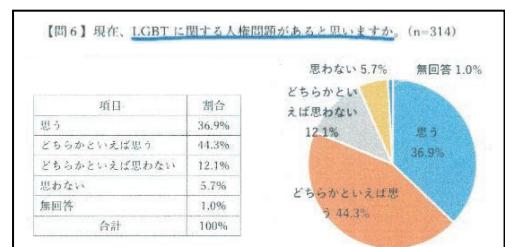
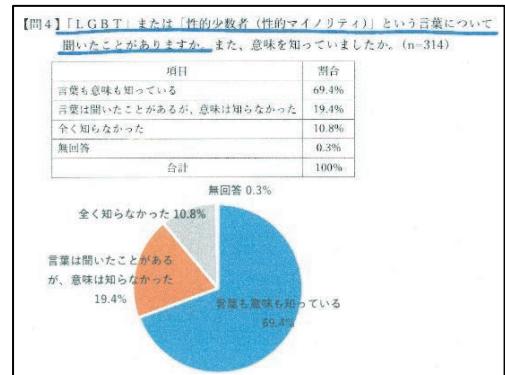
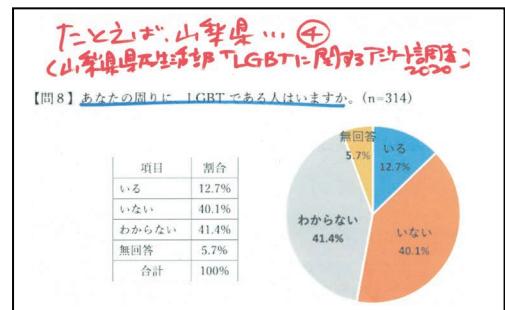
▼鈴ノ木：そうですね。生活の中の特別なイベントとして人にも話せますよね、楽しかったとか、こんな人がいて楽しかったよと。急には無理なので、そういうのが少しずつ、一步ずつですよ。

▼富永：そうですね。今日はオンラインで全国からご参加いただいていると思いますが、山梨県の現況について最後に共有してまとめていきたいと思います。2020年に山梨県の県民生活部が取ったアンケート調査の結果です。

「あなたの周りにLGBTである人はいますか」という質問に対して、「いる」と答えた人が12.7%、「いない」と答えた方が40.1%、「わからない」が41.4%、その他無回答というような状況になっています。私の身近にLGBTの人がいますという人が、およそ10人に1人という回答でした。これを踏まえたうえで、他の質問を併せて紹介したいと思います。LGBTという言葉を知っていますか、あるいは意味を知っていますか、という質問で「いる」と答えた方が10人に1人。しかしながら「言葉も意味も知っている」という人が、69.4%、「言葉は聞いたことがあるが、意味は知らない」が19.4%ということです。したがって、いるかないかに関わらず、7割の方が身近なことではないけれど言葉は知っているという状況です。「LGBTに関する人権問題があると思いますか」という質問に対して「思う」という人、「どちらかといえば思う」という人を合わせると8割近い方が、LGBTに関する問題があると考えています。具体的に次の質問では「どういう人権問題がありますか」ということで、「差別的な言動をされる」「職場や学校などでいやがらせやいじめを受ける」などの人権問題があると答えています。したがって、10人に1人しか身近なところにいると回答していないけれど、人権問題は確かに存在していると、山梨県の人たちは7~8割の人が思っている。そういう意味だと確実に変わってきてると思います。LGBTという言葉で助けられたということもあると思いますし、パートナーシップ制度がそれを推し進めていく側面もあると思います。

このように確実に変わっていく状況の中で最後のテーマです。“誰もが自分らしく生きられる”に向けて、まずはレイン坊から、どんなことが必要か、こうなってほしい、第1部・第2部を受けて、考えたことや思ったことをお話し下さい。

▼レイン坊：午前中からずっと話しているのは、やっぱり知っていくことが大事、制度的に支えていくのも大事、という話だったと思います。話しても、「なんだ、そうなんだー」という反応が私も理想で、なんで制度がないといけないのかというと、制度がないと毎回説明しないといけなくなってしまうんです。この女の人は私の友人ではなくて、私のパートナーで生涯を誓った人でとか、などと言わないといけないことを、異性愛者は、「私の夫です」「妻です」の一言で、「じゃあ保険は入れますね」とか「じゃあICU入ってください」とか。そういうことが本当に一言で済んでしまうということ、そこも一つの生きづらさというものがありますので、そういうところも含めて制度を保ちつつ、ただ制度を作ったからOKではなくて、対話だとか、話をお互い



聞き合うという機会も確保して、2つの柱というか両輪というか、望ましい山梨の甲府のあり方を皆で探していくことがこれから求められるのではないかと思いました。今日はエキサイティングな話をありがとうございました。

▼富永：ありがとうございました。まとめみたいになりましたけど、鈴ノ木さんからもぜひ、「誰もが自分らしく生きられる」に向けてというのが、今日、午前中からのお話でしたが、私は「コウノドリ」という漫画の中で女性同士のカップルの妊娠出産はもちろんですが、私たちが生きて、生まれて、生き延びてというプロセスの中で、その背景にはものすごくさまざまなことがあって、そこでは働いていたり、地域の暮らしであったり、そうしたことが複雑な状況を呈しながら、今ここにあるということが漫画を通じて教えられたと思っているところです。その中で、もちろんセクシュアル・マイノリティに関わる問題もそうですが、第1部では男女共同参画の話もありました。性差別や男女不平等という話も、子を産む産まないの話に関わって存在している。性や性別、性指向や性自認に関わらず、誰もが自分らしく生きられる社会に向けて、制度の変化も必要だと思いますが、それに並行して、先行する世代とも対話を重ねることが大切ですね。パートナーシップ制度って、作ってもやめますって言ったら終わりなんです。やっぱりやめますにならないために足元をしっかりと固めて行くような取り組みも並行して必要だということを改めて確認させていただきました。鈴ノ木さんいかがだったでしょうか、今日一日。

▼鈴ノ木：本当に楽しい時間をありがとうございました。人は一人では生きられないで、その制度もより良い進化をする必要があります。僕の大好きなお医者さんで、神奈川こども病院の豊島先生、NICUの新生児科の先生がいますが、その先生は、例えば親が治療を受けさせないような、受けなくてもいいですというネグレクトと言われてもいいような状況でも、その親を一生懸命理解しようしてくれる先生なんです。それを踏まえて、両親がどうしたら子どもを治療のほうへ向けられるのかということまで、病気を見る前に人を見てくれる先生というのが、僕が本当は「コウノドリ」で描きたかったことです。社会がそういう方向に向かっていってくれれば、子どももLGBTの方々も、生きやすい社会に、政治と一緒に、制度だと成長していくれば、もちろん子どもも自分で成長しなければいけないし、LGBTの方も自分たちが成長しなければいけないです、各々が各々で成長することが、これから先、住みやすい世の中になっていくんじゃないかなと思っています。今日は本当にありがとうございました。

▼富永：ありがとうございました。ではちょうど1分前になりましたので、司会のレイン坊にお返しします。

▼レイン坊：お二方、濃密な時間をありがとうございました。まだまだ話したいところではありますが、お時間が来てしましましたので、これにて第2部は終了いたします。そしていつか甲府のまちでお会いしましょう。本日は長時間にわたり本当にありがとうございました。

第1分科会：性の多様性

取組み方針

- 多様な性やパートナーシップ制度等について、教育の場等での啓発及び市民間での対話・議論の機会の確保
- 多様な繋がりを保障する制度の導入及び多様な市民が参加した上で実際に活用できる体制の構築
- どこに住んでいても生活を保障できるよう、県及び市町村間の連携体制の構築



第1分科会：性の多様性

未来の目指す姿

- 多様な生き方があることを認識し、それらを支えられる
- 多様な性や人生、繋がりがあることを知ることが保証される
- 甲府らしい繋がりの強さの中で誰もが安心して生活できる

選択の自由と個々人の生き方が尊重される社会

II

誰もが生きやすく、
生まれ育ってよかったと思える社会